

## 提言

### 古典教育と講義の自己点検

以下の文章は、日本思想史学会の一会員から他の会員、とくに大学で講義を担当している会員諸氏に対する共同行動の呼びかけです。「提言」などと銘打つと、いかにも大上段に構えた感じで面映ゆいのですが、かねてから私は、日本思想史という学問分野をめぐる環境や条件、また研究・教育の在り方について、このままでいいのかという思いをもってきました。そこへ編集委員会からこの欄への寄稿を求められたので、この機会に、日頃考えていることの一端を述べさせて頂くことにしたわけです。こういう呼びかけをする私には、次のような現状への認識と不満があります。われわれの学会には、倫理思想、文化史、政治思想、比較思想など、いろいろな分野の研究者が入っていますが、それらをひっきりぬめた広い意味

平石 直昭

での「日本思想史」という学問の市民権が、大学制度の上でも学界でもまた一般社会でも、十分に認められていないのではないか、そしてそのことは、日本人が歴史的な自己認識を通じて自己の改革を進める努力が十分でないことと、深く関連しているのではないかということです。裏返していえば、日本思想史のある程度の系統的な知識が、広く国民（少なくとも知識層）の間にわけもたれ、この市民権が確立されるなら、われわれの思想的営みはもっと深みを増すだろうし、それはまた世の中をよりまっとうなものにすることに貢献するだろうということです。

こういう思いには、この分野の専攻者がつ手前味噌の面があるかもしれませぬ。しかしそれを認めたととして

も、なお素朴に考えて、この分野の知識が一般知識社会に分有されていない現状は、なにかおかしいし、バランスを失っているように思われます。かなり前のことで、米国の大統領が来日したとき、歓迎宴のスピーチで、視園の拡大に関する幕末の佐久間象山の言葉を引用したことがあります。しかしその象山の言葉は、スピーチを聴いた日本国民はもとより、いわゆる知識人の多くにとっても、初耳だったのではないでしょうか。それは無理もないので、こうした知的遺産があるにもかかわらず、それが継承されて国民的な常識となり、開かれた社会を作り出すための養分となつてゆくような伝承、もしくは教育の機会や場が、今の日本社会では非常に限られているということなのです。

こうなつた背景には、色々の事情が考えられますが、とくに明治維新以後の「西欧化」と昭和の敗戦後の「民主化」という、日本社会を激変させた二つの出来事が大きいと思います。これに伴つて、人々が世界像や価値観を作りあげるさいの引照基準となる「古典」の内容が、教育の面でも激変したこと、そしてこの断絶を貫いて持続する一貫した思考や価値の基準をつくりだすことに、われわれは成功してこなかったということです。漢文で書かれた儒教思想と、欧語で書かれた近代西欧思想との

違いを想起すれば、この落差の大きさは象徴的に理解されるでしょう。この二つを自己の内面において対決させ、それを通して新しい統一的な思考の基準を作り上げることが、大きな努力を要することはいうまでもありません。そしてそれは、近代日本の思想的可能性をためす格好の試金石となるはずでした。しかし個々のすぐれた例外は別として全体としてみたとき、近代日本では、この思想的努力は必ずしも十分になされなままに終わりました。そのなかでかつて「古典」とされた書物は、現実とは無縁の化石化した訓詁注釈の対象となるか、あるいはたんに時代にそぐわない遺物として捨てさられていったようにみうけられます。

しかしいうまでもなく、歴史的な価値の蓄積や、真に伝統に根付いた前進は、各自が過去の思想にたいして内在的な理解に努め、それと真剣に対決することを通して、はじめて可能になります。日本が抱える一つの大きな問題は、こうした「基準」としての「古典」という理解に立つた古典教育の伝統が、近現代の日本ですっかり根付いてこなかったことにあるのではないのでしょうか。とくに近年は、いわゆる情報化社会というかけ声の下で知識の断片化が進み、「古典」自体が西欧産のそれも含めて分解しつつあります。その意味で「古典」教育は急務で

あり、とくに日本思想史をわれわれが研究し教育することには、維新以後の日本が、取り組むべくしてそうしたいできた課題を改めて取り上げ、日本社会の自己改革を進める活動の一端を担うという意味があると考えます。

この観点からいうと、日本思想史の知識が、少数の専門家のあいだの知識に止まっている現状は好ましくありません。一般知識層の間に日本思想史への関心を広げ、その支持を基盤にして、この学問の市民権を色々なレベルで樹立してゆく必要があります。ではその為には何をしたらよいのでしょうか。

当り前のことですが、「日本思想史」がわれわれの思考の惰性を打ち破り、世界と自己の関係を考える上で啓発的な学問だということが広く認知されねばなりません。そのためには個々の研究者が、魅力ある優れた水準の研究を発表し、学界において「日本思想史」への関心を高めるよう努力する必要があります。また日本思想史学会が中心的な役割を担って、組織的な活動を進める必要もあります。関連学会との共同シンポジウムの開催、海外研究者との交流の促進、最新の研究成果を取り入れた講座物の刊行、代表的な学術誌となるように機関誌の水準を高めること等。そしてこれらは、これまでにも折りにふれていわれてきたことだと思います。しかし以下

では、もつと地道で、しかしこの学問分野を拡大再生産してゆく上で最も基本となる事柄について提案したいと思います。それは学会の活動として、大学での「日本思想史」の講義に関する自己点検を行ったかどうか、そしてその点検の結果を機関誌に掲載して、教育水準の向上に資するようにしたらどうかということです。

私がこれをいうのは、現在の教育課程を前提にする限り、日本思想史の系統的な知識を広めてゆく上で、大学の講義は戦略的な重要性をもっていると考ええるからです（また「座標軸の不在」が指摘される「日本思想史」を、系統的に講義することはかなり困難であり、人知れず心を砕いている人も多いだろうと推測するからでもあります）。そして講義が面白ければ、学生の関心も高まり、それはやがて「日本思想史」の市民権の確立に資するでしょう。市民権を他に訴えるためにも、まず隗より始めようというのが私のいたいことです。しかも考えてみると不思議なことですが、われわれは他の研究者がどんな研究をやっているかは知っていても、どんな講義（教育）をやっているかは殆ど知らずにきたと思います。それはやはり好ましいことではないでしょう。

ただそうはいってもこの作業を、どういう手順に進めればよいのか、私にも成案があるわけではありません。

以下では現段階で思いついたことを列挙してみます。まず、各自がそれぞれの大学で、何年次の学生を相手に、どんな日本思想史の講義をやっているのか、その内容を互いに紹介しあうというのはどうでしょうか。最近ではシラバスの作成が普通になっているはずなので、それを公開して互いに批評しあうのもいいと思います。他にも、講義に利用する史料はどうしているか、参考文献の紹介はどうか、図書館での必要図書の備え付けはどうか等、とりあげるテーマは多々あると思います。そしてこれらを検討してゆけば、大学における日本思想史の講義はどのようなことが望ましいか、その方法や対象、とりあげるべき項目等について、またその全体像についても、複数の選択肢や組み合わせが得られ、ある程度の共通了解が得られるでしょう。それを各自の講義にフィードバックさせてゆけば、教育水準の向上にもつながるのではないのでしょうか。実際はそううまくは進まないかもしれませんが。しかしともかく一步を踏み出す必要はありましょう。さしあたり「日本思想史教育の現段階」というようなタイトルで、大会ないし分科会のテーマとして取り上げることを提案したいと思います。

（東京大学教授）